

記憶の中の住まいプロジェクト 2014.03.12 東松島訪問記

東日本大震災から三年が経った翌日、宮城県東松島市を訪れました。プロジェクトトライアルとして、NPO都市住宅とまちづくり研究会（以下としまち研）理事長杉山昇さんにご紹介頂いたお二人の方の震災で失った住まいの間取り図を起すことが目的です。東京から東さん、廣田、宮城から前回と同じく西條由紀子さんと遠藤陽子さんの計4名で試みました。



野蒜駅標識奥、線路と平行に写るのがベルトコンベヤー



海側の残土置き場へと勢いよく注ぎ落とされ続ける土砂

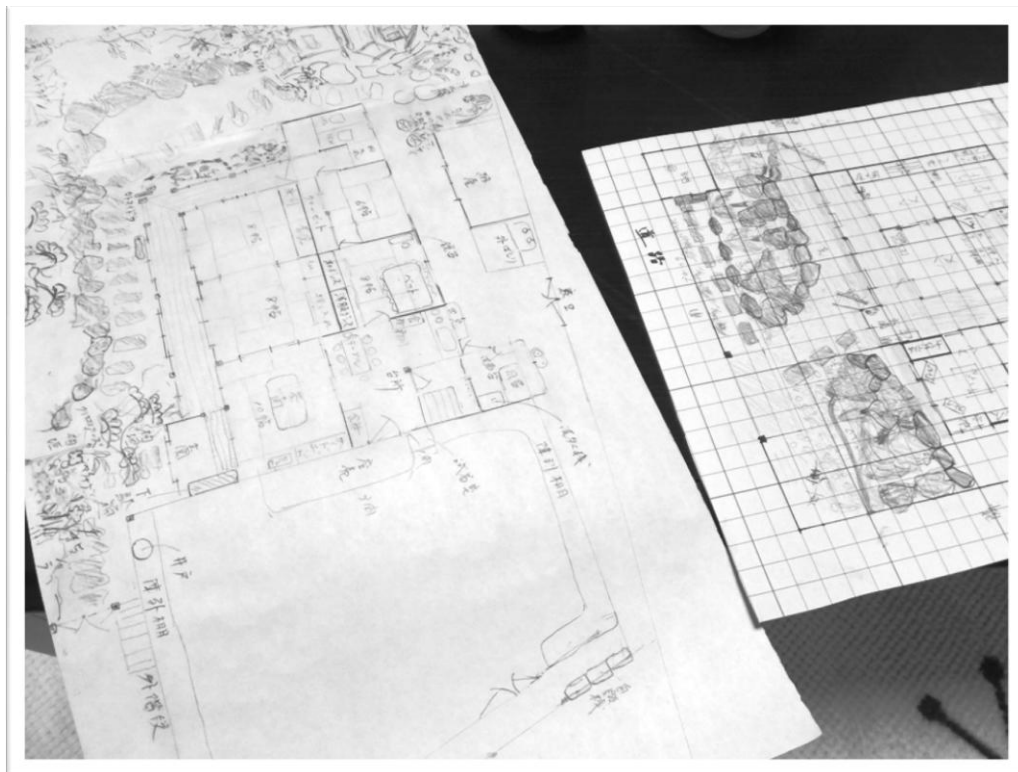
午前10時、仙台駅に西條さんに車で迎えに来て頂き、途中の仙石線野蒜駅の現状を確認して、としまち研東松島事務所のある矢本へと向かいました。

移転が計画されている野蒜駅々舎は被害跡を残したまま在り、駅からは、駅の移転先であり野蒜地区の集団移転先でもある丘陵地帯から切り出された土砂を運搬するベルトコンベヤーが、延々と海岸近くの残土置き場まで土砂を運ぶ姿が確認できました。工期短縮がベルトコンベヤー採用の目的で、設置されたのは今年1月とのこと。迅速に良質な工事が進むことを切に願います。

津波を引き込んだ吉田・鳴瀬川を渡り、昼頃としまち研事務所に到着し、西條さんが気遣って用意して下さった昼食を頂き、遠藤さんとも合流して打ち合わせ。

今回私たちのトライアルに応じて下さるのはKさん、Tさん姉妹。姉妹といっても義理のご関係で、仮設住宅も隣同志で大変懇意にしていらっしゃる仲良し姉妹と事前に伺っていました。としまち研の阿部さんが仮設住宅までお二人を迎えに行って下さり、予定通り1時に事務所到着。初めましてと挨拶を交わし（瞬間、私はこれから良い時間が過ごせると直感！温かで優しいお人柄の滲み出るご挨拶でした。）、阿部さんから事前にお二人に渡っていた『アルバムの家』を「読みました。」と返却して下さいましたので、五右衛門風呂の廣田です、タンスでごはんの東ですとご挨拶。でもまあ、全部は読みませんよね。困ったお顔のリアクションでした（笑）。

それからすぐにびっくりすることが起こりました。お二人は見事な間取り図を作成して来てくださっていたのです。庭の植栽にはひとつ一つ植物の名が描かれ、着色も施された美しい図面。どうしましょ、私たち、出番ありません！！



この素晴らしい間取り図のお陰で、私たちは住まいでどのような暮らしが営まれてきたのか、3時間に亘ってじっくりと伺うことができました。家の間取りが頭に入っているのはしっかりと日常生活を送っていらっしやった証拠。もしかしたら、矢本の方々は表現方法さえ知れば皆さん描くことができるのかもしれません。

義理のご関係はTさんのご主人とKさんが姉弟ということで、Tさんの住まい（写真左図）はKさんにとっては生まれ育った住まいであり、Kさんはご結婚後ご実家のすぐ傍に分家として住まいを構えられましたので（写真右図）、結婚後も一日の殆どを本家となるご実家で店（萬屋）の手伝いなどをして過ごしていらっしやったそうです。本家はお二人共通の思い出もたっぷり詰まった住まいだったのです。

概要を伺った後は姉のKさんチームと妹Tさんチームの二班に分かれてヒアリングを行いました。伺った話はとても興味深い徳のある内容で、改めてきちんと纏めたいと思いました。この報告記ではほんの少しだけTさんから伺ったことを記します。

Kさん班：

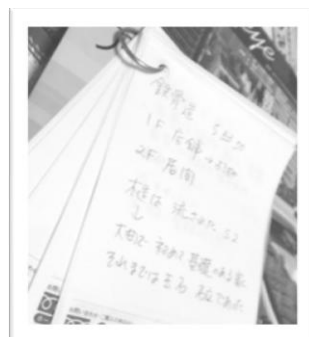
Kさん（左）、東さん（右）、遠藤さん
（撮影：遠藤さん）

遠藤さんは撮影者なので写っていませんが、地元大曲に住んでいらっしゃる建築士ですので、地元ならではの質問を投げかけて下さいました。



Tさん班：Tさん（中央）、西條さん（左）、廣田
キルティングのバッグとスモックドレスはTさんのお手製
（撮影：遠藤さん）

Tチームは廣田が主にヒアリング
を行い、西條さんが記録を取って
下さいました。



カード式西條メモ

本家は萬屋業を営む店舗併用木造住宅で、昭和2年に建設された築82年の住まいでした。地域で初めて布基礎とし、まだ珍しかった二階家も取り入れた先進住宅だったそうです。Tさんがお嫁に来たのは昭和42年4月（23歳）。その時の家族構成は義父（56歳）、義母（50歳）、夫（29歳）とお手伝いさん（15歳）。通いの店の手伝いの方も2、3人いて賑やかな暮らしでした。Tさんは、自分より1か月早く3月から家に入っていた15歳のお手伝いさんを「先輩！」と呼んで親しんでいたそうです。3人の子どもにも恵まれ何不自由なく暮らし、ご実家からも幸せ者と呼ばれていました。

昭和50年に店舗部分を鉄骨で造り変え、Tさん夫婦と子ども達の寝室であった8畳2間の旧木造2階部分は、そのまま鉄骨造の2階に組み入れました。2階に新設した36畳の広間では地域のイベントや展示会を催し、15畳間は衣装持ちでいらしたお義母さんとTさんの着物タンスがずらりと並ぶ納戸として使っていらっしゃいました。

その2階が、津波から姉妹を守りました。ほんの一瞬の行動差が命の有無の差となり、逃げ込んだ2階からは平屋木造部が津波にもぎ取られていく様子を目撃したそうです。

津波から姉妹を守った本家店舗部分 撮影：2012.01.24

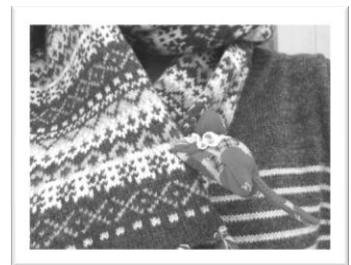


次から次へとお話は拵がり予定した3時間はあっという間に過ぎました。まだまだ夜を徹してもお話を伺い続けたかったのですが、最後にKさんが「来て良かった！」と仰って下さったことを心の糧に、伺わせて頂いたお話を良い形でお返しできるよう次なる機会を頂ける事を祈ってトライアルを終えました。見事な間取り図のお陰で一泊二日の予定は日帰りとなり相成りました。



お二人が仮設住宅の仲間「とんぼの会」で作っていらっしゃる『おしゃねご』。洗濯バサミが骨となっているのでクリップとして使えるアイデア品。ストラップ用リングも付いています。方言で「抱む」ということを「おしゃむ」といい、猫はネゴと濁ります。おしゃね猫とおしゃむ猫を掛けて『おしゃねご』。1ヶ500円で販売しています。欲しい！という方は廣田まで。20個以上数がまとまった段階で注文します。

http://www.youtube.com/watch?v=jTc6M_gN7Qcではその制作風景が見られますよ。お二人も映っていらっしゃいます。最後の方に指導者として映っているのがKさん、そのシーンの前に登場する青地のおしゃねごを持っているのがTさんです。



以上報告：廣田